■GGG+フォーラム東京　思いやりサミット2020

■2020年7月13日（ルポール麹町）

■参加者

学生、世界エイズ・結核・マラリア対策基金（Global Fund）、Gaviワクチンアライアンス、グローバル・ヘルス技術振興基金（GHIT）、国会議員、財務省、外務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、文部科学省、独立行政法人国際協力機構（JICA）、国際機関、民間企業、アカデミア等

■内容

「GGG+フォーラム本会議」では、感染症対策に国境を超えて取り組む重要性が確認された。国の経済発展に関わらず課題となる感染症対策と国際公共財としてのワクチンについて言及があった。日本政府に対して、安全で有効なワクチンを人々が公平に利用できる仕組みを構築するための支援を求める声が上がった。

第2部「教育は、世界を変える」では、コロナ禍で世界的に学習の機会や質について影響が出ている状況が確認され、遠隔教育・アバターロボットといった新しい技術の紹介も行われた。学生も積極的に議論に参加。学生生活に影響が出ていると問題提起した。

ランチセッションでは、感染症の専門家3名が登壇し、新型コロナの治療、ワクチン開発、感染症の歴史等の観点からディスカッションが進められた。学生を含む参加者からは、新型コロナの予防等について多くの質問が寄せられた。

第3部「栄養から考える食の安全保障」の中、「栄養と企業連携」セッションでは、低栄養・過栄養、減塩、女性の痩せ、農業分野におけるデジタルトランスフォーメーション等の課題について企業の試み、官民連携の例が紹介された。「世界と栄養」セッションでは、塩分・糖分の過剰摂取、トランス脂肪酸等に対する個別のアプローチよりも、加工・流通を総合的に見ていかないと問題が解決できないのでは、との発言があった。また、平均値から個別化へという流れの中でのデータの重要性と使用方法について問題提起が行われ、収集データの公共性とプライバシー問題の議論に日本が主体的に関与すべきであるという意見が出された。